

● はじめに——西の郊外から

様々な交通機関の中でも、自分にとってよく使い馴染んでいるという路線があるものである。言わば、「お気に入り」の路線だ。二〇〇二年四月から一年間、わたくしが妻と娘と一緒に生活したパリの街にも、そうした路線がある。大学の在外研究での一年間だったが、パリの街では、地下鉄ではなく、なるべく路線バスを使うよう家族で話し合った。アパルトマンは左岸の十三区の北はずれ、すぐ先は文教地区の五区といった場所であり、最寄りのゴブラン Les Gobelins から、よく「27番」のバスに乗った。十三区のはずれポルト・ド・ヴィトリ Porte de Vitry から十三区の中街街を通過して、プラス・ド・イタリー Place d'Italie—トラン Les Gobelins—リュクサンブール Luxembourg—パレ・ロアイアル Palais Royal—オペラ Opéra を通って終点はガール・サン—ラザール Gare St-Lazare である。パリの南の街はずれから観光地を通過して、北部の交通の拠点までのバスは、その一部を乗車するのでも、楽しかった。乗る回数も格段に多かったように思う。

東京では、どの路線が楽しいか。わたくしはすぐさま、都バス「上69」を挙

● 都バス「上69」



小滝橋車庫→上野広小路
上野公園(循環)
運行時間 約42分
日中毎時3〜4便

げたい。新宿区のおたきばし小滝橋車庫前から、高田馬場、早稲田、そして途中文京区を通って、台東区の上野公園に至る路線である。若い人に、ぜひこの路線に乗ってみて、東京の山の手の起伏を実感して欲しいと薦めてきた。その途中には、近代文学に深いつながりのある場所が目白押しで、漱石においても同じである。わたくしたちも、この路線に乗って、ゆかりの場所を探索してみたい。

西の終点は小滝橋車庫前だが、まずそこにたどり着くまで、JR高田馬場駅を起点にして動き始めよう。バスでの移動の前にまず思い出すのは、大久保だ。隣のJR新大久保駅（山手線）、そこから歩いても数分のJR大久保駅（中央線）近辺のゆかりの場所である。三四郎は野々宮さんの郊外の借家を大久保に訪ね、泊まった深夜に轢死を目撃する体験をすることになる。そうした『三四郎』の一節を読んでも、眼に入る光景から全く現実感はわかない。

三四郎は、本郷界隈の生活が中心だが、その後にも授業に慣れてから、徒歩で郊外散歩をする。

ふわくとして諸方歩いてゐる。田端だの、道灌山だの、染井の墓地だの、巢鴨の監獄だの、護国寺だの、——三四郎は新井の薬師迄も行った。新井の薬師の帰りに、大久保へ出て、野々宮君の家へ廻らうと思つたら、



高田馬場駅前



落合の火葬場の辺で途を間違へて、高田へ出たので、目白から汽車へ乗つて帰つた。
(四)

本郷から半日の散歩で西に行く場所としては、新井薬師が最も遠いように思う。道を間違えた「落合の火葬場の辺」とは、地図を見れば、今の小滝橋の位置になるのか。そこで南に行かなければならないのを、東に行つてしまつたわけだ。この当時は高田馬場の駅はなく、少し北の目白駅まで歩いて山手線に乗ることになるのである。これらの地名を一つ一つ確認しながら、三四郎の歩いた道をたどるのは、楽しい。

○ 小滝橋 — 一つの葬列

都バス「上69」は、小滝橋車庫前が始発である。戻る形になるが、高田馬場駅から「小滝橋車庫前」行きで、まず始発点まで行くときよい。バスに乗る前に、出来るなら小滝橋よりもさらに西、当時の上高田村にあつた落合斎場を訪れるのもいいだろう。かつて東京市の火葬場が町中でなく、郊外に位置していたことはよく知られている。根岸で亡くなつた正岡子規は日暮里（町屋）の火



○ 小滝橋車庫前

葬場で茶毘に付されたし、東京の西部、例えば牛込で亡くなると、落合の火葬場ということになる。漱石が亡くなり茶毘に付されたのもここだが、その前に漱石はここで、忘れられない体験をしていた。

三日前に急逝した五女雛子のささやかな葬列を漱石が出したのは、一九一一年（明治四四）十二月二日のことである。日記に「今朝九時の出棺」とあるが、「〇僧は五人」云々の記述だけでは、焼香の後、早稲田南町の自宅から出棺して、すぐ落合の火葬場へ行ったのか、自宅から一度寺（可能性としては、やはり夏目家の菩提寺小日向の本法寺となるう）へ行き、そこで葬儀をすませて落合へまわったかは不明である。このときの体験を踏まえた『彼岸過迄』の「雨の降る日」では、「寺では読経も焼香も形式通り済んだ。（中略）式が果てから松本と須永と別に一二人棺に付き添って火葬場へ廻ったので」（六）云々とあり、後者のようにも思える。『彼岸過迄』構想メモを含む断片の中に、「関口水道町ノ変化」（この町名は本法寺のすぐ近くである）とか、「〇子供の死。葬、火葬場、骨拾／〇関口と早稲田の変わりやう」という一節があり、この時の葬列に関連すると思われる記述がある。愛児雛子の葬列に付き添いつつ、漱石の眼には自宅から歩いて一時間足らずのこうした場所の風景すらも、いつにな

小滝橋

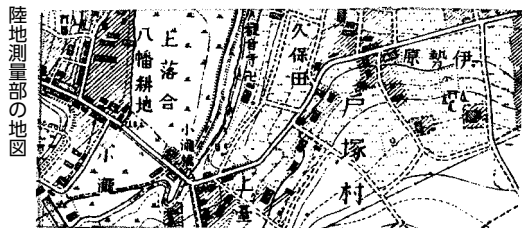


く印象深く刻みつけられたのである。

わたくしたちも、この日の漱石と同じように、落合まで『彼岸過迄』や日記の記述を念頭に置きながら、歩いてみよう。手元に陸地測量部の一万分の一地形図「早稲田」「新井」（いずれも一九〇九年測図、一九一〇年三月発行）があれば、なおよい。山手線高田馬場駅の開業は一九一〇年九月十五日だった。そこからさらに西の上落合方面へは、少しずつ上り道である。現在は商店街が続くが、当時の地図では家がまばらに存在するだけだ。「雨の降る日」の「七」には、葬儀の翌日の「骨上」の日のこととして、こんな描写がある。

車が暗いだらく、坂へ来た時、彼は又小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子の為に指した。夫には弘法大師千五十年供養塔と刻んであった。その下に熊笹の生ひ茂つた吹井戸を控えて、一軒の茶見世が橋の袂を左も田舎路らしく見せてゐた。

早稲田通りの坂が今度はやや下りになった所が、作品には「橋」として出て来る小滝橋である（流れは神田川）。交通情報でよく「小滝橋交差点では」として出て来る、山の手の交通の要所の一つである。「供養塔」の描写をたよりに、近くの大悲山観音寺（真言宗）の寺の本堂とやや離れた所、寺の人が「奥



陸地測量部の地図

の院」と呼んでいた所（現在は駐車場）に目的のものを発見することが出来る。寺の山門は小滝橋から一五〇メートルほど北方だが、「奥の院」は逆に南側、小滝橋近くにあたり、直線距離五〇メートル足らずである。わたくしたちはそこに、「弘法大師一千五十年供養塔」と刻まれた四メートルほどの高さの四角い塔が、裸の木の傍らにぽつんと立っているのを見出す。周囲の建物は焼けたが、この塔だけは元の位置のままだとのことだ。側面には「明治十六未季三月廿一日」と建立日が刻まれており、その塔を建てた檀家の人々の名前が数多く見える。現在の小滝橋付近はビルが立ち並んでいるが、当時はそこにさしかかると、この塔が見えたはずである。道からは字まで読めないのに、漱石はあれは何だろうと、塔のあるやや小高い所まで出かけたのだろうか。そして、地元の人々の弘法大師への思いを、刻みつけたように思う。亡き人を思う気持は、やはり同じなのだ。

十二月二日の日記に同じような記述があるが、刻まれた文字（一字脱落がある）を作品の中にまで記しているのは、「供養塔」の三文字が漱石に印象的だったからではなかったか。「一軒の茶見世」は特定出来ず、その後の追跡は出来なかったが、観音寺の人の話では、このあたりは昔は井戸を掘ると良い水が

● 観音寺

